

本科 2 期 10 月度

解答

Z会東大進学教室

## 東大日本史



## 17章 桂園時代と第一次世界大戦

### 問題

#### 解説

##### 【着眼点】

「日本の産業革命の特徴」が問われているが、とくに他国と比べてという意味ではなく、日本の産業革命がどのように達成されたかを具体的に述べればよい。述べるべき分野は、(1)繊維工業、(2)重工業、(3)農業との関連、と指示されているが、これらの発展と時代背景、政府の政策を関連付けて考えることになるだろう。

##### 【知識の整理】

産業革命とは、動力の転換による機械制生産が手工業生産を凌駕して生産力が飛躍的に増大し、資本主義的生産体制・経済体制が採られるようになる変革であり、日本における産業革命は、日清戦争前後の蒸気力を用いた繊維工業（軽工業）での産業革命と、日露戦争後の電力を用いた重工業での産業革命との2つの時期にわたって進展した。以下、産業別にその発展の状況を見ていく。

#### ●繊維工業

##### (1)綿紡績業

綿紡績業では、1883（明治16）年、蒸気機関を用い、イギリス製のミュール紡績機を導入して1万錘規模で操業を開始した大阪紡績会社の成功以来、大阪を中心に大規模機械制工場が次々に設立され、それまでのガラ紡（がうんときむね）（臥雲辰致の発明、第1回国勧業博覧会で発表された）による綿糸生産に代わって生産力を伸ばし、1890（明治23）年には国内の綿糸生産高は輸入高を上回っていた。

1890（明治23）年の恐慌を越え、日清戦後経営の中で政府の産業振興政策が進行すると、綿紡績業では企業勃興も推進され、綿糸輸出税（1894年）・綿花輸入税（1896年）の撤廃などの関税優遇措置をもとに、中国・インドからの綿花の輸入と生産効率の高いリング紡績機を用いての生産が拡大し、国内需要を満たして、中国・朝鮮への輸出を増大させ、1897（明治30）年には綿糸輸出高は輸入高を上回った。

##### (2)製糸業

開国以来輸出の中核を担ってきた製糸業は、江戸時代以来の農村の養蚕業に支えられて北関東・甲信地方のいわゆる東山養蚕地帯を中心に国産繭を用いて生産が行われていたが、小規模工場が多く、生産形態も従来の座織製糸と器械製糸とが混在していた。

1890年代になると、輸出の増大につれて生産の増大が望まれ、1894（明治27）年には、器械製糸生産が座織製糸生産を上回り、主にアメリカに向けて輸出を増大させて有力な外貨獲得産業となり、1909（明治42）年には、日本は清国を抜いて世界1位の生糸輸出国となった。

### (3)織物業

1890年代には、製糸業・綿紡績業の発展によって絹織物業・綿織物業などの織物業でも次第に機械制生産が主流になった。なかでも、すでに1880年代に飛び杼（ジョン=ケイの発明）を導入して、1885（明治28）年には生産額が輸入額を上回っていた綿織物業では、1897（明治30）年に豊田佐吉らが考案した国産力織機（動力は石油発動機）が導入されて機械制生産への転換が進んだ。

## ●重工業

### (1)鉄鋼業

重工業の発達は軽工業に比べて立ち遅れていたが、日清戦後経営の中で軍備拡張が行われると、鉄鋼国産への欲求も高まり、日清戦争の賠償金を用いて、1897（明治30）年にドイツの技術を導入して官営八幡製鉄所が着工され、1901（明治34）年には清國の大治鉄山の鉄鉱石と筑豊炭田の石炭を用いて操業を開始した。

八幡製鉄所を中心とする鉄鋼生産は日露戦争後に本格化し、日本の銑鉄生産量は1901（明治34）年の5万トンから1913（大正2）年には24万トンへと増加し、その70～80%は八幡製鉄所の生産であった（自給率は30～50%）。一方、1907（明治40）年には、北海道室蘭にイギリスの技術を導入した日本製鋼所が三井資本によって設立され、また池貝鉄工所がアメリカ式旋盤の完全製作に成功するなど鉄鋼関連の民間企業の発展も目立ってきた。

### (2)造船業

造船業も政府の造船奨励策のもとで日露戦争後に発展し、三菱長崎造船所や横須賀海軍工廠（旧幕府横須賀製鉄所）では1万トン級の国産鉄鋼船が建造された。なかでも三菱長崎造船所では1908（明治41）年に太平洋航路の豪華客船天洋丸が建造されるなど技術的にも世界水準に達し（ただし軍艦についてはイギリス・ドイツの技術に負うところがまだ大きかった）、国内自給率も60%に達した。

## ●日本の産業革命を支えた諸条件

次に上記のような産業革命の進展を支えた諸条件について考えてみる。

### (1)資本の蓄積と企業勃興

1881（明治14）年に大蔵卿に就任した松方正義による緊縮財政政策（松方財政）によって農村は深刻な不況に陥り、自作農の中には土地を手放して小作人となる者や都市に流入して賃金労働者となる者が多く現れる一方、富裕農民は土地を集積して寄生地主となり、資本の蓄積が進行した。

寄生地主の富は、1880年代後半になり不況が峠を越すと鉄道や紡績会社へと投資され、最初の企業勃興ブームが起こり、この傾向は1890年不況を越えても進行した。

### (2)生産性の向上

生産性の向上とは、つまるところ「いかに安く、いかに多くの製品を作るか」ということである。この点では1893（明治26）年の日本郵船によるインド航路の開設によって、安価良質なインド綿花の輸入が可能になり原料コストが低下するとともに、ミュール紡績機からリング紡績機への転換によって、生産力が増大した。さらに熟練工に代わって地方から低賃金の女子

を労働力として調達することが可能になった。なお、製糸業の労働力が農村女子の家計補助的低賃金労働によって支えられていたことも合わせて確認しておきたい。

#### (3)金融制度の整備

日清戦後経営の中で政府は産業振興政策を進め、日本銀行から普通銀行を通じて産業界への資金供給を行う一方、日本勧業銀行（1897年、農工業発展のための長期貸付）、日本興業銀行（1902年、産業資本の長期融資）、農工銀行（1889～1900年各府県に設立、地方の農工業育成のための長期貸付）などの特殊銀行を次々に設立し金融の確保に当たった。

#### (4)市場の拡大

日清戦争の講和条約である下関条約によって、朝鮮の独立と揚子江沿岸の沙市・重慶・蘇州・杭州の開港開港が約され、中国・朝鮮への市場が拡大された。

#### (5)法制度の整備による産業保護

日清戦争後、軍備拡張と産業の振興を中心に戦後経営を推進した政府は、さらに法制度の整備による産業の育成もはかった。綿紡績業に関しては先に取り上げたように1894（明治27）年に綿糸輸出関税免除法、1896（明治29）年に綿花輸入関税免除法を成立させ、同じく1896（明治29）年には海運・造船業の発達をめざして航海奨励法・造船奨励法が制定された。翌1897（明治30）年には、第2次松方正義内閣の下で貨幣法が成立し金本位制が実施されて欧米との貿易の振興がはかられている。

### ●農業

最後に産業革命の進展と農業および農村の関連に触れる。

1890年代以降米価など農産物価格は安定して上昇し、大豆粕などの金肥の普及によって米の生産高も徐々に上昇していたが、産業革命の進行による非農業人口の増加（農業人口の減少）は米の国内需要を増大させ、次第に米不足の状況を呈するようになった。

また、工業化の進行は繊維工業原料を供給する農村の生産の在り方にも影響し、インド綿花などの輸入によって国内の綿花生産が衰退する一方、活発な生糸輸出によって桑の栽培や養蚕などが農家の主要な副業となり、1900（明治33）年には産業組合法が成立して中小生産者の保護がはかられるようになった。一方で、このような商業的農業の発達は農村の自給体制を崩壊させ、それまで行われていた自家用衣料の生産は減退していった。

## 【解答のポイント】

### 1 産業革命の背景

松方財政以後の農民層の分解：寄生地主の資本の蓄積、貧農の労働者化

日清戦後経営での軍備増強と産業振興政策：特殊銀行による金融確保、産業保護法制の整備

### 2 繊維工業（日清戦争後）

- 編紡績業：インド綿花輸入、洋式紡績機導入による生産効率の上昇

⇒中国（清国）・朝鮮へ輸出

- 製糸業：国産繭を用い、座縫製糸から器械製糸へ転換して生産を増大⇒アメリカへ輸出

- 織物業：豊田式国産力織機の導入で生産が増大

### 3 重工業（日露戦後に本格化）

- 鉄鋼業：官営八幡製鉄所を開設し、鉄鋼国産に着手⇒日露戦後に本格化

- 造船業：三菱長崎造船所、横須賀海軍工廠での国産鉄鋼船建造⇒自給率の上昇

### 4 農業との関連

非農業人口の増加、商業的農業の発達⇒産業組合法

## 【解答例】

松方財政後の寄生地主の資本の集積と没落農民層による

労働力の供給は企業勃興を促し、日清戦争前後の政府の

産業振興政策を受けて、繊維工業に始まる産業革命が進

展した。編紡績業では安価なインド綿花と洋式紡績機に

による大規模工場生産が行われ、政府の関税優遇もあり、

日清戦争で拡大した中国・朝鮮市場に輸出が伸長した。

製糸業も器械製糸の普及でアメリカに輸出が増大し、綿

織物業では国産力織機を導入して生産を伸ばした。政府

の特殊銀行設立による金融支援や農村女子の低賃金長時

間労働がこの産業の発展を支えた。重工業は日清戦後の

軍備増強政策を受けて官営八幡製鉄所設立で鉄鋼国産が

めざされ、日露戦後に本格化して歐州の技術を導入した

鉄鋼生産が行われ、三菱長崎造船所を中心に国産鉄鋼船

も建造されて自給率が増大した。一方、工業の発達は農

業人口を減少させるとともに桑栽培・養蚕など商業的農

業を発達させ、政府も産業組合法を制定して支援した。

（400字）

## 添削課題

### 解説

#### 【着眼点】

資料として、1900年前後の製糸・紡績業に関する表があり、これを参考にして論述を行う問題である。表の中でも、次の点に着目してほしい。よく見ると、表の中でもとくに強調してある点である。

①「生糸は横浜港、綿糸は神戸港からの輸出が、輸出量の大半を占める」

ここだけでも、生糸は東日本で生産され、綿糸は西日本で生産されたということと結びつく。これをさらに、生糸の生産（製糸業）の中心が、北関東および諏訪地区を中心とする長野・山梨であり、綿糸の生産（紡績）は、大資本からの、大阪紡績会社が中心であったという知識と結びつける。

②「『輸入』を見ると、綿花の輸入高が極めて大きく、逆に、生糸の輸入高は僅少である」。

生糸の生産では、原料は国産であった。綿糸の紡績業を行う原料となる綿花は、ほとんど輸入に頼った。

#### 【知識の整理】

##### ●製糸業

製糸業とは蚕から生糸をとる業種のことである。古くから、北関東や、諏訪地区を中心とする信州や甲斐で養蚕業が行われ、簡易な用具のみを用いた、人の手による製糸が行われていた。開国後、これを基盤に、生糸（絹の糸）は輸出の主力商品となり、さらに増産が行われることとなった。この輸出激増に対して開発されたのが、座縄製糸である。歯車または調べ糸を伝導体として、手回し（または水力）による煮繭なべから、繭の糸目を繰り、杵にかけるという方式のものである。これらは木製であり、その生産の多くは家内工業で熟練した女子労働者に依存した。幕末から明治前期までは、この座縄製糸による製糸が主流であったが、糸の巻取り部分の構造が改良された器械製糸の登場におされた。器械は富岡製糸場のようにフランス製のものもあるが、多くは木製・半木製で地元の大工によって作られた。そして1894（明治27）年には、器械製糸の生産量が、座縄製糸の生産量を上回った。国産の繭・器械で生産された生糸は、横浜の売込商を通じて主としてアメリカに輸出され、外貨を獲得する重要輸出産業として発展した。

##### ●綿糸紡績業

紡績業とは綿から綿糸を紡ぐ産業である。明治10年代、政府による200錐の機械制紡績業は、基本的に失敗に終わり、まったく別に、民間の新興の会社が工場を設立することになった。その中心が、1883（明治16）年、有力銀行や華族・商人の資本により1万錐の規模で成立した大阪紡績会社である。

企業勃興ブームの反動として、1889～90（明治22～23）年に恐慌（1890年恐慌）が起こった。この時期、大資本の大坂紡績会社などの機械紡績が輸入綿糸と競争し、シェア拡大をはかるために生産増大をはかり、過剰生産に陥った。このことは、生産の増大による労働力不足を

招き、さらには労賃を急騰させることになった。その解決策として、①割安のインド綿花の輸入により、コストを削減する、②機械をイギリス製のミュール紡績機から、アメリカ製のリング紡績機に切り換えることで操作を軽く容易にし、男手の必要を省く代わりに大量の女工を採用し、労働力を補う、という手段が採られた。こうして1890（明治23）年には、綿糸生産高が輸入高を超えた。

日清戦争後、企業勃興が再発し、紡績業でも多くの新企業が生まれた。一方、1894（明治27）年には綿糸輸出税が撤廃され、綿糸を国内の綿織物業用原料としてのみに確保する必要がなくなった。すなわち、これを契機に綿糸は、中国・朝鮮方面を中心とした輸出品としての重要な地位を占めていくことになった。また、1896（明治29）年には綿花輸入税が撤廃され、これまで紡績業の原料として保護されていた国内の綿作は大打撃を受けて完全に衰退し、綿糸の原綿は安価で質のよいインド綿花にとって代わられた。こうして1897（明治30）年には、綿糸の輸出額が輸入額を超えたのだった。

### 【解答のポイント】

#### 製糸業

- ①北関東や甲信地域の養蚕業により原料を自給した
- ②1894年に器械製糸が座繰製糸の生産量を凌駕
- ③中小工場が中心
- ④横浜港からアメリカへ輸出された

#### 綿糸紡績業

- ⑤インド・中国の安い綿花を神戸港から輸入し原料とする
- ⑥大資本による大阪周辺の大工場を中心に機械生産が行われた
- ⑦生産が増大し輸入綿糸を駆逐
- ⑧中国・朝鮮方面を中心に輸出。1897年に輸出が輸入高を上回る

### 解答例

製糸業は北関東・甲信の養蚕業から原料を調達し、簡易器械を用いた中小工場で生産される器械製糸が1894年に座繰製糸の生産量を凌駕し、横浜からアメリカへ輸出された。綿糸紡績業は、大阪周辺の機械制大工場で1880年代に生産が始まり、神戸港から安価なインド・中国綿花を輸入するとともに、中国・朝鮮への輸出を進め、国内市場で輸入綿糸を駆逐し、1897年には輸出高が輸入高を上回った。

（180字）